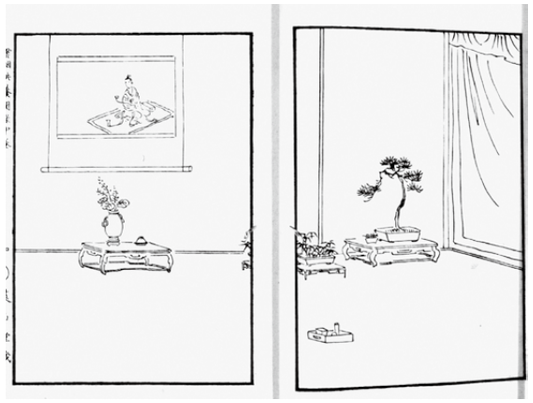
10月

【収蔵品紹介】
煎茶会図録②

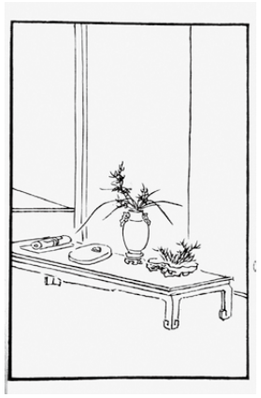
2023年8月号に続き、煎茶会図録を取り上げます。今号では、京都で開催された煎茶会の図録に見られる盆栽の傾向を読み取っていきます（表参照）。

煎茶会図録では、「盆栽　青磁盆栽黄薔薇置於檀卓上」のように、飾っている品物の名称が見出しとして書かれています。まずは、盆栽がどのような名称で表現されているか注目してみます。大阪では一部の例外を除いて、文久3年刊行の『青湾茶会図録』から大正時代まで、殆どの煎茶会図録で「盆栽」と表記されています。一方、京都の煎茶会図録を見ると、『圓山勝会図録』では、煎茶道具や花瓶には見出しがあるにもかかわらず、盆栽には見出しがありません。『雲烟供養図録』では「盆栽」のほか「水盤」の表記があり、『東山茶会図録』では見出しがなかったり、「盆栽」のほか「水盤」や「盆景」と表記されたりしています。見出しがない理由は定かではありませんが、「盆栽」や「水盤」、「盆景」については、使い分けていたことが読み取れます。たとえば、「盆栽」の場合は、「盆栽　江西窯長方盆種松檀坐」あるいは「盆栽　南京白磁長方式盆栽草花」というように、植えるという意味を持つ「種」や「栽」が使用されています。「水盤」の場合は、「水盤方盆種松檀坐」というように、鉢から取り出して根をむき出しの状態にした「露根」、いわゆる根洗いの場合に使用されています。「盆景」の場合は、「盆景　梨皮泥楕円水盤中置雪割草」とあり、植物を盆上に配置したものの意味で「盆景」が使用されていたようです。なお、大阪でも「盆景」が使用される場合がありますが、「盆栽」との差異は明確ではありません。つまり、京都では「盆栽」や「水盤」、「盆景」の名称を、植物の培養状況によって使い分けていたといえます。



「雲烟供養図録」第3席　挿絵

続いて、盆栽として登場する植物の種類に注目すると、大阪で頻繁に登場する石菖は京都では余り見られず、『圓山勝会図録』と『東山茶会図録』に1つずつ見られるのみです。代わりに、松や蘭のほか、草物や種々の雑木盆栽が明治前半から登場します。松や蘭は大阪、京都、東京の煎茶会で共通して登場しますが、その他は3つの地域でそれぞれ異なる樹種が見られ、地域性を感じることができます。



「雲烟供養図録」第9席　挿絵

京都で開催された煎茶会の図録

通番	書名	製作者・版元	発行年代		会場	概要
1	「圓山勝会図録」	熊谷直行	明治9年	1876年	円山	鳩居堂七代目熊谷酔香の追薦のため、息子直行が明治8年10月6日、7日に開催。
2	「雲烟供養図録」	杉田三郎助	明治13年	1880年	東山	莱山堂主人・杉田竹香供養のため、息子尚綱が明治12年5月18日に開催。
3	「東山茶会図録」	岩田嘉兵衛	明治41年	1908年	東山の左阿弥楼他	骨董商の岩田秋竹堂主人が先考追薦のため、明治41年2月に開催。
4	「直入居士薦事図録」	奥田天門	明治44年	1911年	東山の若王子、永観堂、南禅寺、粟田、祇園	直入居士（田能村直入翁）の一周忌のため、門弟70人、補助6人、幹事27人によって、明治41年4月に開催。
5	「亦復一楽茶会図録」	越智武一	大正7年	1918年	平安神宮周辺	田能村竹田の「亦復一楽帖」の臨画成就を記念し、竹邨桑者（田近竹邨）が大正7年5月26日開催。

ます。

次に、盆栽の表記の順番について、大阪と京都で比較してみます。大阪では明治前半まで盆器・植物・卓の順番であったのが、次第に植物・盆器・卓に変化していったことを8月号で紹介しました。しかし、京都では、『直入居士薦事図録』を除いて盆器・植物・卓の表記となっています。このことから、京都では植物よりも盆器に重きを置いていたと考えられます。

最後に、盆栽の飾られている場所に注目してみます。『圓山勝会図録』では前席のほか、本席にも盆栽が飾られ、『雲烟供養図録』では本席や副席に盆栽が見られます。変化が見られるのは明治40年代で、『東山茶会図録』では広間席の「瓶花盆栽」に複数の盆栽が見られ、『直入居士薦事図録』では「盆栽排列」という盆栽の陳列席が登場します。大正時代については事例が少なく、盆栽飾りの傾向を読み取れませんが、明治前半では茶席の本席や前席、副席に盆栽が飾られ、明治40年頃には陳列席などで盆栽を展観するようになったと言えます。また、大阪と京都で比較すると、大阪の『青湾茗醼図誌』や『直入翁寿筵図録』では、盆栽はおもに屋外に飾られ、茶席には盆栽の姿はみられませんでした。しかし、ほぼ同時期に京都で開催された煎茶会の『圓山勝会図録』や『雲烟供養図録』では、屋内の茶席に盆栽が飾られており、大阪と京都で飾り方に違いがあったことがわかります。

以上から、京都では明治前半から盆栽が室内に飾られており、茶席において喫茶とともに楽しまれる場面もあったことがわかりました。また、鑑賞の主眼は植物よりも盆器にありましたが、様々な種類の樹木が扱われ、植物の培養状況に応じた名称の使い分けがされていたこともうかがえました。このように盆栽の扱いは地域によって異なることも見えてきましたが、現時点で明確な理由はわかっていません。地域ごとの植生や培養環境、煎茶会の趣旨、席主の嗜好によるものかもしれません。あるいは、大阪の煎茶会では明治10年代から盆栽園が関わり、東京では明治20年代から関わっている一方、京都では盆栽園との関係が見えないことが影響している可能性もあります。この点は、今後も研究を進めて明らかにしていきたいと思います。

（当館主事　立石見雪）